

関連性理論による文学性の考察

橘 高 眞一郎

〔抄 録〕

文学理論では、文学性は読者が既成概念を再解釈することによって生成される、と考えられている。しかし、既成概念の再解釈とは、一体どのようなプロセスによって行われるのであろうか。

文学鑑賞は、読者と文学作品のコミュニケーションである。従って文学鑑賞における既成概念の再解釈のプロセスは、コミュニケーションにおける発話解釈のプロセスの解明を目的とする関連性理論によって説明できる。

本稿は、文学鑑賞における既成概念の再解釈がどのようなプロセスで行われるのかを関連性理論によって考察した後、関連性理論による発話解釈プロセスを6段階に整理したチェックリストを E. Hemingway の短編集 *In Our Time* (1925) に収録されている5つの短編に適用して、そのプロセスの具体的な記述を試みた。

キーワード 文学性、関連性理論、処理労力、文脈効果、弱い推意

1. はじめに

文学的テキスト (literary text) と非文学的テキスト (nonliterary text) を分かつ文学性 (literariness)、換言すれば審美的価値 (aesthetic value)、とは何であろうか。V. Shklovsky や R. Jakobson に代表されるロシア・フォルマリスト (Russian formalist) やプラハ学派 (Prague school) の言語学者は、詩を文学的テキストの典型として分析し、異化 (defamiliarization) という言語形式が文学性を生成する、と主張した。

It is to the Russian formalists and Prague school linguists in the early decades of this century that we owe much of the theory of poetic language that has proved influential on poetics and stylistics, given the added impetus through the work of Roman Jakobson. One main thesis is that the characteristic poetic function consists

in foregrounding and estranging language and meaning consciously and creatively against the background of non-literary language, by devices of deviation and also repetition or parallelism. (Wales, 2001². s.v. POETIC FUNCTION.)

しかし、異化のような言語形式だけが文学性を生成するわけではないことは、例えば、本来詩でないもの（非文学的テキスト）が、詩（文学的テキスト）として解釈される found poem（例えば、商品ラベルなどから採った散文の一段落をリズム単位に切るなどして並び換え、詩の形にしたようなもの）の場合を考えてみればすぐわかる。

本来、どのような使い方をされようとも常に文学的である表現というようなものは存在しない。著名な文学作品からの表現でも、それをそこから取り出して別のコンテキストで使えば、多くはもはや文学的であるとはいえなくなってしまう。文学批評のレベルで問題となるような意味なり価値なりは、その言語表現に対して言語体系の中で自動的に規定されるような性質のものではなく、それが用いられるコンテキストとの関連で決まってくるものである。しかも、そのコンテキストは言語的なコンテキストのみでなく、非言語的なコンテキストをも含めたものでなくてはならない。このように考えてくれば、現在の段階での言語学の方法が文学研究にとって明確な限界を有することは明らかであろう。（大塚・中島. 1982. s.v. poetics and linguistics.）

文学性の生成には、言語形式だけではなく、テキストと読者の交互交流（transaction）が関わっている。S. Miall と D. Kuiken は、①前景化された文体や語りの特徴（foregrounded stylistic or narrative features）②読者による異化への反応（readers' defamiliarizing responses to them）③その結果生じる個人的意味の修正（the consequent modification of personal meanings）、という3段階を想定し、既成概念の再解釈が文学性を生成すると考えた。

Briefly, literariness is constituted when stylistic or narrative variations defamiliarize conventionally understood referents and prompt reinterpretive transformations of a conventional feeling or concept (Miall and Kuiken, 1999 : 123)

しかし、文学理論で主張されている既成概念の再解釈とは、具体的にどのようなプロセスを指すのであろうか。筆者は、既成概念の再解釈のプロセスは、関連性理論（relevance theory）における弱い推意（weak implicature）の生成プロセスによって説明できると考えている。

本稿は、そのプロセスを6段階に整理したチェックリストを E. Hemingway の短編集 *In*

Our Time (1925) に収録されている5つの短編に適用して、既成概念の再解釈のプロセスの具体的な記述を試みた。

2. 関連性理論

コミュニケーション理論には2つのモデルがある。一つはコードモデル (code model) で、コミュニケーションは、メッセージのコード化 (encoding) と解読 (decoding) として捉えられている。もう一つは、P. Grice の提唱した推論モデルで、コミュニケーションは、証拠 (発話) の生成と解釈 (推論) のプロセスとして捉えられている。D. Sperber と D. Wilson が提唱した関連性理論は、P. Grice の推論モデルをもとにした修正推論モデルで、コミュニケーションを「聞き手が言語的意味の解読を証拠とし、その解読結果と文脈に基づいて推論を行うことによって、話者の意味を復元する」(東森・吉村, 2003: 11) プロセスとして捉えている。

2.1. 認知原理と伝達原理

関連性理論によると、人間の認知は自分に関連のある情報に注意を払うように出来ているので、聞き手は、普通、自分に関係のある情報にだけ注意を向ける。これは、関連性の認知原理 (Cognitive principle of relevance) と呼ばれる。

Human cognition tends to be geared to the maximization of relevance. (Sperber and Wilson, 1995²: 260)

従って、話し手は、まず、注意を払うのに十分な情報—関連性 (relevance) のある情報—を伝えている旨を聞き手に伝える必要がある。この行為は意図明示的伝達行為 (act of ostensive communication) と呼ばれるが、それによって話し手は、聞き手に最適な関連性の見込み (presumption of optimal relevance) を伝える—話し手が伝達している情報に注意を払うことで、聞き手は利益を得られる可能性があるという期待感を持たせる—ことが出来る。これは、関連性の伝達原理 (Communicative principle of relevance) と呼ばれる。

Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance. (Sperber and Wilson, 1995²: 260)

2.2. 処理労力と文脈効果

提供する情報が最適な関連性の見込みを持っているということが、コミュニケーション成立

の前提となるわけだが、最適な関連性は、処理労力（processing effort）という支出（cost）と文脈効果（contextual effects）という収益（benefit）のバランスによって達成される。

処理労力とは、聞き手が、話し手の発話をもとに自分の記憶などに既に存在する想定（assumption）—旧情報（old information）—にアクセスする際の難易度（accessibility）のことで、処理労力が大きくなるにつれて、聞き手は情報処理に困難を感じるようになり、最終的には情報処理を中断する。従って、コミュニケーションの観点からは、処理労力は出来るだけ小さいほうがよい。

文脈効果とは新情報（new information）によって想定（旧情報）に加えられる操作（追加、強化、削除）によって生じるものである。文脈効果には、①新情報と旧情報が組み合わさったものを前提とした推論から引き出された帰結を認知環境（cognitive environment）—想定—の集合体—に追加する文脈含意（contextual implication）②旧情報に更なる証拠や確信を与える文脈強化（contextual strengthening）③旧情報と新情報が矛盾した時、弱い方を削除する矛盾（contradiction）の修正、の3種類がある。これら3つの文脈効果は、推論（inference）によって得られる。コミュニケーションの観点からは、文脈効果は出来るだけ大きいほうがよい。

An individual's total cognitive environment is the set of all the facts that he can perceive or infer: all the facts that are manifest to him. (Sperber and Wilson, 1995² : 39)

We will argue that when you communicate, your intention is to alter the cognitive environment of your addressees; but of course you expect their actual thought processes to be affected as a result. (Sperber and Wilson, 1995² : 46)

The sort of effect we are interested in is a result of interaction between new and old information. ... Contextual implications are contextual effects: they result from a crucial interaction between new and old information as premises in a synthetic implication. ... On the other hand, new information may provide further evidence for, and therefore strengthen, old assumptions; or it may provide evidence against, and perhaps lead to the abandonment of, old assumptions. (Sperber and Wilson, 1995² : 109)

2.3. 最大の関連性と最適な関連性

話し手の意図明示的の伝達行為によって最適な関連性が見込みが伝達されて始まった発話解釈

は、聞き手による推論の過程の中で処理労力と文脈効果のバランスが取れ、最適な関連性が達成された時に終了する。理論上は、最小の処理労力で最大の文脈効果が得られれば、最大の関連性が達成されたことになるわけだが、実際の発話がこのような関連性を持つこと（一を聞いて十を知るといようなこと）は、あまりない（cf. 西山. 2001: 298）。通常、処理労力が小さくても文脈効果が小さければ関連性は低くなるし、処理労力が大きくても文脈効果がそれを上回って大きければ関連性は高くなる。従って、発話解釈のプロセスで追求されるのは、最大の関連性ではなく、最適な関連性の達成である。

Extent condition 1: an assumption is relevant in a context to the extent that its contextual effects in this context are large.

Extent condition 2: an assumption is relevant in a context to the extent that the effort required to process it in this context is small. (Sperber and Wilson, 1995²: 125. Italics in the original.)

The assessment of relevance, like the assessment of productivity, is a matter of balancing output against input: here contextual effects against processing effort. ... other things being equal, an assumption with greater contextual effects is more relevant; and, other things being equal, an assumption requiring a smaller processing effort is more relevant. (Sperber and Wilson, 1995²: 125)

2.4. 強い推意と弱い推意

処理労力と文脈効果のバランスによって最適な関連性が達成されるプロセスは、換言すれば、文意 (literal meaning) から推意 (implicature) を引き出すプロセス、つまり推論である。聞き手は、発話の文意を、まず表意 (explicature) へ、次に高次表意 (higher-level explicature) へと処理した後、それをもとに認知環境の中の前提推意 (implicated premises) へとアクセスし (処理労力)、帰結推意 (implicated conclusions) から文脈効果を得る。

An implicature is a contextual assumption or implication which a speaker, intending her utterance to be manifestly relevant, manifestly intended to make manifest to the hearer. We will distinguish two kinds of implicatures: *implicated premises* and *implicated conclusions*. ...All implicatures, we claim, fall into one or the other of these two categories.

Implicated premises must be supplied by the hearer, who must either retrieve them from memory or construct them by developing assumption schemas retrieved

from memory. ... Implicated conclusions are deduced from the explicatures of the utterance and the context. (Sperber and Wilson, 1995² : 194-195. Italics in the original.)

帰結推意には強い (strong) 推意と弱い (weak) 推意の2種類がある。例えば、Peter が Mary に “Would you drive a Mercedes?” と訊いて、Mary が Peter に “I wouldn’t drive any expensive car.” と答えたとしよう。その場合、Peter が “A Mercedes is an expensive car.” という前提推意から “Mary wouldn’t drive a Mercedes.” という帰結推意を持つならば、これは本来、Mary が Peter に対して顕在化 (manifest) させたかった (Peter の発話と関連性のある) 帰結推意であるから、強い推意である。また Peter が “A Rolls Royce is an expensive car.” という前提推意から “Mary wouldn’t drive a Rolls Royce.” あるいは “People who refuse to drive expensive cars disapprove of displays of wealth. Mary disapproves of displays of wealth.” という帰結推意を持つならば、これも Mary が Peter に誘発させた推意と考えられ、強い推意である。しかし、Peter が “A Mercedes is an expensive car.” という前提推意から “People who would not drive an expensive car would not go on a cruise either. Mary would not go on a cruise.” という帰結推意を得るならば、これは Peter 自らが作り出した推意—Peter が自分で文脈を拡張した結果得たものであり、Mary には予測できない推意—であり、弱い推意と呼ばれる (cf. Sperber and Wilson, 1995² : 199)。

3. 文学的テキストと非文学的テキスト

文学的テキストも非文学的テキストも最適な関連性を達成することによってテキスト解釈を可能にしているが、文脈効果を得る過程で生起する推意は異なっており、非文学的テキストは強い推意によって、文学的テキストは弱い推意によって文脈効果を得ると考えられる。何故なら、まず、①非文学的テキストは情報伝達が目的であり、書き手は出来るだけ早く、読み手に自分の意図を顕在化させる必要がある (強い推意) のに対して (またそうでなければ役立たない)、文学的テキストは読者に既成概念の再解釈をさせることが目的であり、作者は、読者独自の概念 (弱い推意) を想起させるための工夫を凝らすからである。

The technique of art is to make objects “unfamiliar,” to make forms difficult, to increase the difficulty and length of perception because the process of perception is an aesthetic end in itself and must be prolonged. (Shklovsky. 1965 : 12)

次に、②弱い推意は、著者の意図によって誘導されるものではなく、聞き手が自らの責任で生成するものである。これは推意の不確定性 (indeterminancy) —読者によって生成する意味が異なる—と呼ばれているが、関連性理論では、多様な弱い推意 (不確定な推意) が生成されることを、特に詩的効果 (poetic effects) と呼んで、文学的テキストの特徴とみなしている。

Let us give the name *poetic effect* to the peculiar effect of an utterance which achieves most of its relevance through a wide array of weak implicatures. (Sperber and Wilson, 1995² : 222. Italics in the original.)

...poetic effects create common impressions rather than common knowledge. Utterances with poetic effects can be used precisely to create this sense of apparently affective rather than cognitive mutuality. (Sperber and Wilson, 1995² : 224)

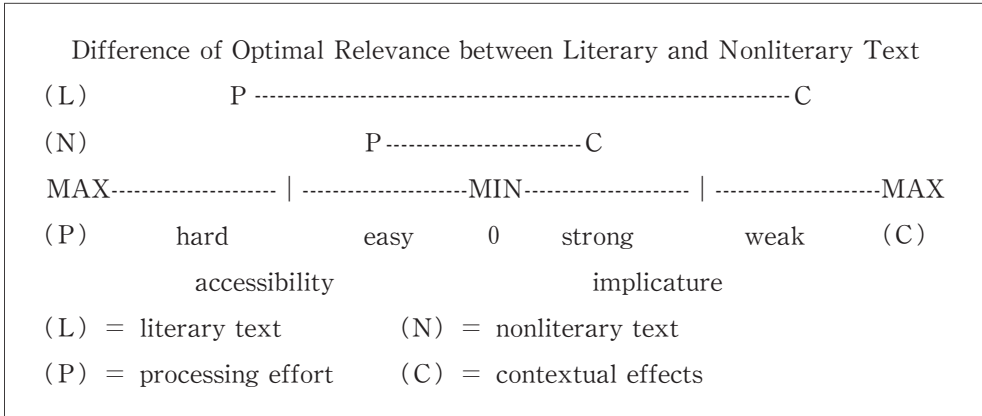
Poetic effects, we claim, result from the accessing of a large array of very weak implicatures in the otherwise ordinary pursuit of relevance. (Sperber and Wilson, 1995² : 224)

The only way of establishing the relevance of this utterance [i.e. His ink is pale.] is to look for very weak implicatures. This requires several extensions of the context. (Sperber and Wilson, 1995² : 237)

当然のことながら、著者に誘導された強い推意による文脈効果よりも、読者が創発した弱い推意による文脈効果のほうが大きい。

一般的に、非文学的テキストでは、テキスト解釈は自動的 (automatized) になり、時間もあまりかからないが、読者独自の自由な解釈の余地は少なくなる。これに対して文学的テキストでは、テキスト解釈は非自動的 (deautomatized) になり、ある程度の時間もかかるが、読者独自の解釈の余地は大きくなる。文学理論で言う既成概念の再解釈とは、関連性理論で言う弱い推意の生成に相当する。

下の図は、文学的テキストと非文学的テキストの違いをまとめたものである。文学的テキストでは、処理労力は大きいのが、文脈効果もそれ以上に大きく、弱い推意によって生成されているのに対して、非文学的テキストでは、処理量力は小さく、文脈効果は大きいのが、強い推意によって生成されているため、文学的テキストの文脈効果の大きさには及ばない。



4. 文学作品の分析

現段階で関連性理論が分析対象としているのは、比較的短い対話文という小さな単位に限られている。しかし、筆者は関連性理論による発話解釈プロセスの枠組みは、ひとつの文学作品全体というより大きな単位にも適用可能であると考えている。そこで、関連性理論による発話解釈プロセスを6段階に整理したチェックリストによって文学作品（ここでは、E. Hemingway の5つの短編）を分析し、既成概念の再解釈のプロセスを出来るだけ具体的に記述することを試みた。チェックリストの6段階とは、①情報（new information）②前提（old information）③労力（processing effort）④帰結（weak implicature）⑤効果（contextual effects）⑥価値（aesthetic values）である。

分析の記述内容は、あくまでも筆者の主観的判断にもとづくものであるが、少なくともその判断が著しく妥当性を欠いたものではないということを保証する必要があるので、比較資料として、E. Hemingway 研究者による批評（嶋，1975）も示しておく。

4.1. インディアン部落（Indian Camp）

この短編は、ニック少年がインディアン部落で体験した生と死がテーマで、内容は、インディアン部落に赴いた医師である少年の父が帝王切開で逆子を出産させ母子の命を救う一方で、足に大怪我をして同じ部屋に寝ていた夫が、おそらく自分の将来に悲観し、また妻の産みの苦しみの悲鳴に耐えきれなくなって自殺をしてしまい、生と死の現場を一度に体験した少年は大きな衝撃を受ける、というものである。

[Checklist]

①情報：妻の出産の現場にいた夫が自殺をする。

- ②前提：一般に、夫は妻の出産を気遣い、子供の誕生を喜ぶ。人生の幸せは子供の誕生。
- ③労力：①から②にアクセスすることは困難。
- ④帰結：子供が誕生する喜びを上回る苦悩がある場合もある。
- ⑤効果：新たな想定追加による文脈含意。
- ⑥価値：理不尽。不条理。未知への恐れ。

[比較資料]

……足に受けた大けかが、そういう絶望の深い淵からの脱出の不可能性を痛感させ、それが彼の暗愚な頭のなかで、妻の悲鳴と不可分的に結びついて、絶望的意識をいっそう決定的なものにつのらせた結果、彼はその苦悩に耐えきれず、死によって自己を清算せずにはいられなかったのであろう。(嶋, 1975: 89)

……この自害したインディアンの夫も、けっきょく、生まれ出た息子に対して ‘proud father’ ではなく、医者と同じ敗残者にすぎないというコントラストのなかに、人間の不条理に対する作者の鋭い風刺をくみとることができるだろう。(嶋, 1975: 94)

4.2. エリオット夫妻 (Mr. and Mrs. Elliot)

この短編は、25才の夫と40才の妻の不幸な夫婦生活がテーマで、内容は、高齢と病弱による肉体的不能の妻とプラトニック・ラブによる精神的不能である学者兼詩人の夫が、世間並みに子宝を得ようと努力するが、思うようにはいかず、結局、夫は詩作と白ワインに、妻は昔の女友達との同性愛に溺れながら日々を過ごしていく、というものである。

[Checklist]

- ①情報：中年の同性愛の妻と若いプラトニック・ラブの夫の奇妙な夫婦生活。
- ②前提：一般に、年齢の離れた夫婦の結婚生活は、形だけのものになりやすい。
- ③労力：同性愛者の妻とプラトニック・ラブの夫という奇異な状況により、①から②にアクセスすることはやや困難。
- ④帰結：年齢差が大きいばかりでなく、精神的に異常なカップルの夫婦生活は、破局するしかない運命である。
- ⑤効果：新たな想定追加による文脈含意。
- ⑥価値：結婚生活への不信感、虚無感。

[比較資料]

さて、ヘミングウェイの作描かれている夫婦間の、あるいは恋する男女間の愛の交渉に

は、二人の男女が愛し合えば、幸福な結末はあり得ないとする、この作家の宿命的悲観論が一貫して底流をなしていると考えられる。（嶋，1975：188）

そして、この短編の最後のくだりは、その奇怪な関係に自己満足している（それが異常だという意識を持っていないだけ、いっそう奇怪だといえる）人たちの姿が、最高に皮肉な形で浮き彫りにされている。（嶋，1975：195）

4.3. とても短い物語（A Very Short Story）

この短編は、若い負傷兵と看護婦の恋愛の破局がテーマで、内容は、イタリアの陸軍病院で負傷兵の主人公と結婚を誓った看護婦のルーズが、終戦になって彼氏が米国に復員すると、彼を裏切ってイタリア人将校と婚約し、挙げ句の果てに捨てられる、というものである。

[Checklist]

- ①情報：若い男女の恋愛が、女の打算のため破局する。
- ②前提：一般に、若い男女の恋愛は純粋である。恋愛は打算ではない。愛があればどんな障害も乗り越えられる。
- ③労力：①から②にアクセスすることは困難。
- ④帰結：いつまでも変わらない女の愛情など信用できない。女なんて当てにならないものだ。女は打算で恋愛をする。
- ⑤効果：若い男女の恋愛は純粋で打算ではないという情報が削除される矛盾修正。
- ⑥価値：女の愛への不信感。逆らえない運命に対する諦観、虚無感。

[比較資料]

ここにも、戦争といういまわしい現実によって踏みにじられた不幸な恋の結末を見るのであり、そういう虚無的な時代に生きた作家として、ヘミングウェイがつねに男女の愛について書いていた、「二人の人間が愛し合っている場合、ハッピー・エンドなどあろうはずがない」という悲劇的信念が、ここでも提示されている。（嶋，1975：158）

この短編の中に描かれている愛の性格は、しかしながら、戦争の世代の人間がたどる不幸な悲劇的運命としてかたづけしてしまうよりもむしろ、戦争のために正常な本能の作用を阻害され、理性的判断を誤った人々が追いやられる不条理な運命の展開によって、その悲劇的皮肉（tragic irony）が強調されているところにあるといえるだろう。（嶋，1975：158-159）

……戦争という否定的現実なかで、唯一の心のよりどころとしての愛にも裏切られるという、いっそう悲劇的とさえいえる皮肉な運命に、戦争の世代の特異な虚無的世相を如実に反映しているということができよう。(嶋, 1975: 159)

4.4. 革命党员 (The Revolutionist)

この短編は、純真無垢な青年の抱く理想と現実のギャップがテーマで、内容は、レッドパージによって、故国ハンガリーから追放された青年が、同志の手引きによってイタリアに身を隠し、その後スイスに政治亡命するが、結局、スイス当局によって逮捕投獄される、というものである。

[Checklist]

- ①情報：マンテーニャを好まない青年が、イタリアを経由して、亡命先のスイスで逮捕投獄される。
- ②前提：一般に、迫害を受けた人々は亡命する。迫害を逃れても、亡命者には困難がつきまとう。迫害は悲惨なものである。
- ③労力：イタリア・ルネサンス期の宗教画家マンテーニャが迫害のシンボルとして使われていることが理解できなければ、①から②にアクセスすることが困難。
- ④帰結：迫害され亡命しても、結局、安住の地はない。
- ⑤効果：亡命者の運命に対する認識を強めるため文脈強化。
- ⑥価値：逃れがたい運命に対する諦観、虚無感、冷笑。

[比較資料]

けれども、この青年が最後にスイス人によって逮捕され、投獄されたというニュースは、青年の理想主義的な、素朴な精神が現実のかせに拘束されたことを意味する。(嶋, 1975: 182)

ちなみに言えば、この青年のスイスへの峠越えというロマンチックな亡命の企ては、『武器よさらば』のなかで、ヘンリーとキャサリンがスイスとの国境の町ストレーザから暴風雨について、ボートでスイスへ亡命する筋に生かされているように思われるが、そのいずれの場合も、前途に虚無的な現実がきばをむいて待ちかまえていたのである。(嶋, 1975: 183)

4.5. 雨の中の猫 (Cat in the Rain)

この短編は、倦怠期を迎えた若妻の嘆きがテーマで、内容は、夫に相手にされない妻がホテ

ルの外で雨に濡れてうずくまっている子猫を見つけ助けようとするが逃げられ、後でホテルの老亭主が代わりの三毛猫をメイドに持たせてよこす、というものである。

[Checklist]

- ①情報：倦怠期を迎えた若妻が、子猫を捕まえることで、夫に相手にされない不満を解消しようとするが、失敗する。
- ②前提：一般に、夫が妻を相手にしないと、妻は欲求不満になり、ヒステリーを起こす。夫婦仲が悪くならないためには、夫は妻を理解する必要がある。
- ③労力：子猫が若妻の欲求不満を象徴しているということが理解できないと、①から②にアクセスすることは困難。
- ④帰結：結婚生活は幻滅させられるものであり、救いようがなく、誰もどうすることも出来ない。
- ⑤効果：結婚生活によくある倦怠期の認識を強めるため文脈強化。
- ⑥価値：結婚生活に対する幻滅、失望、倦怠感。

[比較資料]

せっかくのホテルの主人の好意で、女中がもって来てくれた「大きな三毛猫」(a big tortoise-shell cat) は、同じ猫ではあっても、彼女が自分でみつけ、それに自己のイメージを見、自分の心を通わせた「雨のなかの、かわいそうな子猫」、自分の理想の世界のとりらを開いてくれるものと彼女が想像した子猫ではないという事実によって、若妻はいつそう深刻な、救いがたい幻滅の淵に落ち込んでいくのである。そして同時に、彼女が夢想していたロマンティックな理想的世界の住人として、絶大な信頼と好意をよせていたホテルの亭主が、けっきょく、彼女の描く高尚な世界など理解するはずもない、単なるお人好しの、親切なだけの、現実的な老亭主にすぎなかったことをみせつけられることによって、若妻はいつそうきびしい、救いのない孤独をかみしめなければならないのである。(嶋, 1975: 205-206)

5. おわりに

文学的テキストと非文学的テキストの違いは、異化（逸脱）という言語形式にあるのではなく、文脈効果を得る過程で生起する推意の違いによって生じる。また文学理論で漠然と既成概念の再解釈の結果として片付けられていた文学性（審美的価値）は、関連性理論で説明される弱い推意の生成プロセスの結果である。本稿は、関連性理論による発話解釈プロセスをひとつの文学作品全体というより大きな単位に適用して、既成概念の再解釈のプロセスを具体的に記

述する試みを行った。分析の記述内容は、あくまで筆者の主観的判断にもとづくものに過ぎないが、文学鑑賞という漠然とした概念もまた、関連性理論という認知理論によって説明がつくということの一端を示し得たのではないかと思っている。

〔引用文献〕

- 大塚高信・中島文雄 (監修). 1982. 『新英語学辞典』. 東京: 研究社.
嶋 忠正. 1975. 『ヘミングウェイの世界』. 東京: 北星堂.
西山佑司. 2001. 「関連性理論」. 辻 幸夫 (編). 『ことばの認知科学事典』. 294-303. 東京: 大修館.
東森 勲・吉村あき子. 2003. 『関連性理論の新展開—認知とコミュニケーション—』. 東京: 研究社.
Miall, S. and Kuiken, D. 1999. What Is Literariness? Three Components of Literary Reading. *Discourse Processes*. 28(2): 121-138.
Pilkington, A. 2000. *Poetic Effects: A Relevance Theory Perspective*. Philadelphia: John Benjamins.
Shklovsky, V. 1965. Art As Technique. In *Russian Formalist Criticism: Four Essays*, ed. and trans. Lee T. Lemon and Marion J. Reis, 3-57. Nebraska: University of Nebraska Press.
Sperber, D. and Wilson, D. 1995² [1986] *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
Wales, K. 2001² [1990]. *A Dictionary of Stylistics*. London: Longman.

〔使用テキスト〕

- Hemingway, E. 1925. *In Our Time*. New York: Boni & Liveright. Paperback Edition. New York: Scribner. 2003.

(きったか しんいちろう 英米学科)

2007年10月17日受理